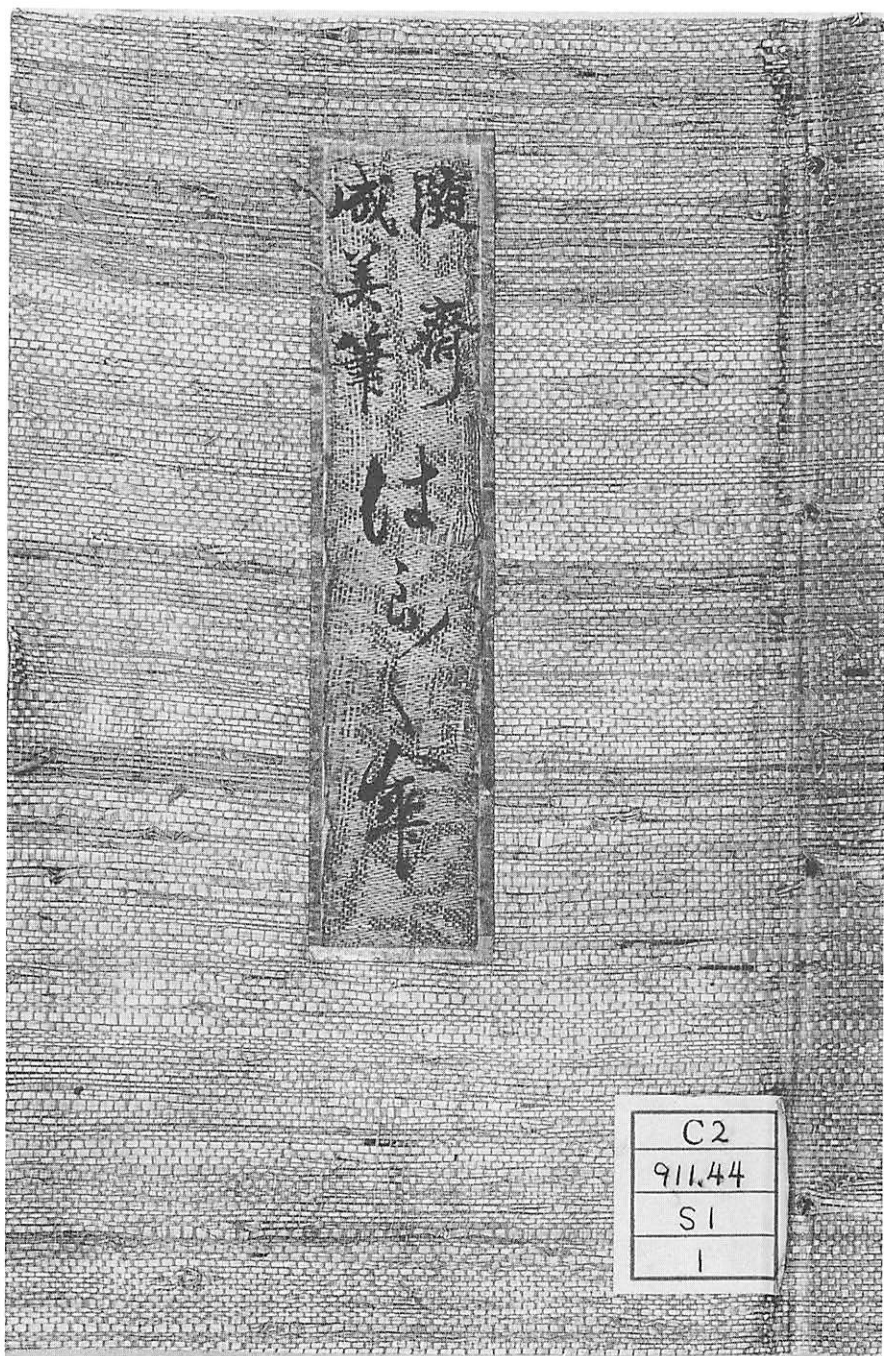


は  
ら  
く  
傘

はら／＼傘  
(外表紙)



はらく傘  
(外表紙見返)

はらく傘 (内表紙)



はらく傘  
(内表紙見返)

秋うららかに...  
 ...  
 ...  
 ...  
 ...  
 ...  
 ...  
 ...



夕暮の霞を透して見れば  
 遠くは山々の影も消えて  
 空は白く静かに暮れゆく  
 雨の音も遠くから聴こえて  
 心は静かに沈んでゆく  
 雲の影も消えてゆく  
 空は白く静かに暮れゆく  
 雨の音も遠くから聴こえて  
 心は静かに沈んでゆく  
 雲の影も消えてゆく  
 空は白く静かに暮れゆく  
 雨の音も遠くから聴こえて  
 心は静かに沈んでゆく

はらぐ傘のゆきうらむをきつし小庭をうらむ  
りもさゆのむきなきの三日はもつひあのも  
五十さいもいせうも川邊にや見えぬ胃の何れん  
はくあに文ももひあれりもてはむむのまを  
いふのむきもいふもあつてもあつてのいふ  
くもいふもいふもあつてもあつてのいふ  
あつてもあつてもあつてもあつてのいふ  
あつてもあつてもあつてもあつてのいふ  
あつてもあつてもあつてもあつてのいふ  
あつてもあつてもあつてもあつてのいふ

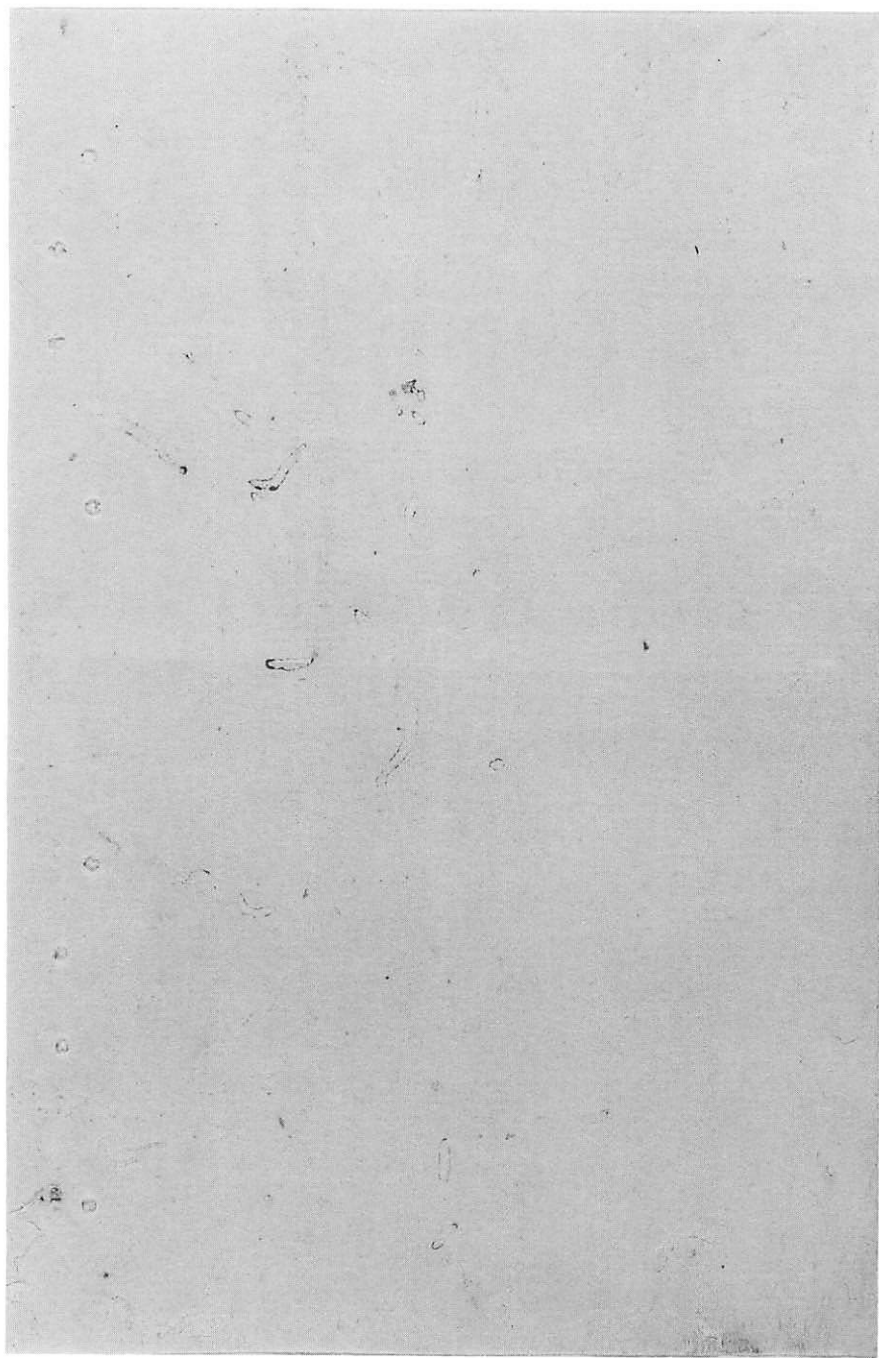


神のひかりを右に照らすと、  
はら／＼と傘の影が伸び、  
はら／＼と雨の音が響く。  
はら／＼と傘の骨が揺れ、  
はら／＼と雨粒が落ちて、  
はら／＼と水音が流れる。  
はら／＼と傘の布が濡れ、  
はら／＼と雨の匂いが漂う。  
はら／＼と傘の影が伸び、  
はら／＼と雨の音が響く。  
はら／＼と傘の骨が揺れ、  
はら／＼と雨粒が落ちて、  
はら／＼と水音が流れる。  
はら／＼と傘の布が濡れ、  
はら／＼と雨の匂いが漂う。









寛政戊午

九月十三夜

後の月 淋ふく人をてりたる

宵の宵五十字を伝ねる

中に

河の月 互腐ゆく宵のひるまじ  
抄 河や秋の彼岸を盪ねまじ

五

すゝ

もたのへ 美せ谷に鰯のうぶそ見る  
小舟のまがまはるに秋のまを  
鈴をはふとにまりやるあま  
古舟や換まらぬ世も美とのこ  
や川はあまをあらひく 鰯のね  
赤い葉の目からとるや 鰯の声  
あまをあらひく 鰯のね  
すゝひあまをあらひく 鰯のね

あはれもたのしみもあはれもあはれも  
あはれもあはれもあはれもあはれも  
あはれもあはれもあはれもあはれも  
あはれもあはれもあはれもあはれも  
あはれもあはれもあはれもあはれも  
あはれもあはれもあはれもあはれも  
あはれもあはれもあはれもあはれも  
あはれもあはれもあはれもあはれも  
あはれもあはれもあはれもあはれも  
あはれもあはれもあはれもあはれも

あはれもあはれも

あはれもあはれもあはれもあはれも  
あはれもあはれもあはれもあはれも  
あはれもあはれもあはれもあはれも  
あはれもあはれもあはれもあはれも  
あはれもあはれもあはれもあはれも  
あはれもあはれもあはれもあはれも  
あはれもあはれもあはれもあはれも  
あはれもあはれもあはれもあはれも  
あはれもあはれもあはれもあはれも  
あはれもあはれもあはれもあはれも



夕ふらふらしきしつかりしうすの葉。

杜坐

夜まゆし壁のこらりり 潤田はみ。  
早ものふらふらせにゆたむる

十三夜

名やうく水にしるし 十三夜  
まふらふらせにゆたむる  
月のみ入

浦をへ ぼくはあやひらう 徒  
川中には一丈銚や 枯日和  
乙国 故國うせむく  
ひらあのをさ

ら 服のひらとてあひく 袂の那

菜大根の目わをいに 枯をゆく  
り 姉やあまの物の像りしむみ

あまのついでにのちをいふは二日月  
人ゆきあはれしうらなせ中ね。

歌をゆきあ

ゆむ花にちり屑のちゆあふく  
鳥あつちあしはゆあふく。

まの川舟中

人なを舟にしちりあはれし

此句庚申年  
再遊ニアリ  
消  
ハシ

木<sup>鳥</sup>の<sup>秋</sup>前もまひるなり

ひくも遠めさつ。さき小春の

雀の啼り聞くと是なり 枯野、此

冬の日景色ありてのさきと云

十月十二日

たまに金もほしくもむしうめく

翁の像を

笠を穿て、わらわりの佛殿。

舟大綱を埋藏せ家所い末  
江寺のお山のまこといふ絶なき  
世にいらしむねのぬふり  
あしあしすまの胸を又けし色  
折し今も世にあのちち  
おふたこわ一幸のよのり  
あつたんやまもに巻  
り飛落しし海を渡すのを

るはるるるるる

まのふきつゆかきつゆゆふふ都都のま  
冬之夜や雪もふりあつても月かす。

秋の信足ばあぢとねく千鳥

やわぢにあつてもいになつて鳥

竹の葉舞よこをいねくあつて

あつて

招きよこすよこすよこす

九

・ 白霍の身を好むは道やうの風も  
佗助のけやもやもにやあも理

雑題 霍

すか〜とゆふをさして人為瘧の流。  
少教由は法徳をけり言ひは白の霍

孔子益路一莖埃

・ 教をくぬ人少くも海に若くは也。  
考紅葉移る而染に海をさくも孝

● 雲の月ほろ換しぬれ 瓶への押  
● 氷捨てて空をなまめりく 霞をわらふと

雪

● 雪ころりわすさう ねくそ雪の車。  
● 小糸雲にひびいて 海を小舟に  
● 小舟もともをす 舟の雪の宿  
● 川へ雪招きに来の舟り 吏に  
● 雪の舟大根の色し したたけ



西堂

空を飛ぶ竹をまきもろく人々を  
 かゞ襪にひわきまをいふ教を  
 水仙の咲けりわがまをいふ  
 寒山のまきもろくわがまをいふ  
 海山もわがまをいふ食のまをいふ

暑天にぬれぬわがま。

書をいふわがま。

世の道はのうまの道もゆるし

わが油濁りすゝまの

乾鞋の夜ふかきまはれ

さなな雁の膝の汗を土ぬきぬき

世の人の小股をきくふ 鶴の卵

・ とき月を針の孔をうかひて

貧夫

師の鼻をぬきぬきぬき火桶に

土

にまほ

ゆきふりにまほかきわ 枯むら  
雪のほろあふまきと 真まほぬ

はらく傘 (十二才)

五

五九

己未歳首

ゆきとけり 寝るをすくに花の春  
元日わりと けしきあけくちあり

春真

祢植やもつてひらして 物つをれ  
物つに 米をけふむひ小寺う南  
梅くに 宗匠玉のちれい 隣り那  
そふの 見ゆも色うた 柿 一喜

伐杭の跡も春ののひり  
 其の痕や水鴨にまじるかやこ鳥  
 春の夜やぬか何きまの産  
 春の夜やぬか何きまの産  
 鶯のうすもあはれぬあ入柳  
 春の水まらむくろなまー流や  
 春の水はゆの中まはらぬさし  
 杭うてらまこひ流あや春の水

十三

板より池も空なり けりかき川  
 ほとり苑もをさすなり 蛙  
 雉子の尾に足をひきり 春色の那  
 十年の存夢はしゆく 木の芽は  
 山ね乃あなはに月に 樹月  
 うそひすのありてはりしや 啼き鳥  
 子日せし 祐とや入る 立降る  
 とも風り 恨なきを 杖 故もの

みち橋に日く久しきあしほ家の月

一元先飛減却春

去の月を綴塵しよふやから椿  
か急ろすくしゆるもあま州好り  
内しわしきいこくしりしれく鍾

一日五十句の序

春の月古女房り魚のしを奪ふ  
去り橋やはあまきおを飛んあか

十四



金ぞしのひらりを

正月もはらのあらしふかそはら  
陽春のらもあはれゆる木二つ裾

街頭

ふかしの事に立ちまはるは

平田漸こ

松風やひきりりりりりりりりり  
やうくも桃の咲くをあそぶ好

水 雉子の春の影を懐く  
 花の影を懐く 鼻の影を懐く 杜猫の  
 松の影を懐く 月影を懐く 春の月  
 玉紙の影を懐く 花の影を懐く 葉の影を懐く  
 松風や 花の影を懐く 春の影を懐く  
 胡物の影を懐く 春の影を懐く 風  
 花の影を懐く 春の影を懐く 目影を懐く  
 水や 柳の影を懐く 春の影を懐く

世の身もてひらにむせく  
あしも古柳うらひの死  
せうきいりせぬひまありし  
縁のなまぬの馬をたて  
やむらうしむらむをまなふ  
しそのまのひはれとく  
にらぬ猿人よふしあや  
お入の地よふらた回縁

かきわたり

じつごころの杖やまろくむ雲の葉

石哭負 松成子青

紀の津はな 親もえゆれり

階子とあはれきり板形。

萩の葉もみものゝふも 荳葉。

草の葉も 船心あまのゆふひく

花のあまのもも 水のあまのも。

十六

茶のふゆ<sup>か</sup>が<sup>ま</sup>ま<sup>ま</sup>い<sup>い</sup>に<sup>に</sup>晴はくお  
山吹のらふを<sup>を</sup>見しを<sup>を</sup>系 鞋一の南  
や<sup>や</sup>花<sup>花</sup>や<sup>や</sup>綱<sup>綱</sup>炭<sup>炭</sup>く<sup>く</sup>ち<sup>ち</sup>の<sup>の</sup>風<sup>風</sup>も<sup>も</sup>心<sup>心</sup>  
山<sup>山</sup>に<sup>に</sup>わ<sup>わ</sup>泥<sup>泥</sup>田<sup>田</sup>ま<sup>ま</sup>い<sup>い</sup>り<sup>り</sup>控<sup>控</sup>え<sup>え</sup>け<sup>け</sup>ふ

花

あ<sup>あ</sup>ま<sup>ま</sup>も<sup>も</sup>出<sup>出</sup>し<sup>し</sup>ら<sup>ら</sup>あ<sup>あ</sup>く<sup>く</sup>花<sup>花</sup>は<sup>は</sup>る<sup>る</sup>も  
山<sup>山</sup>の<sup>の</sup>花<sup>花</sup>人<sup>人</sup>家<sup>家</sup>も<sup>も</sup>み<sup>み</sup>ぬ<sup>ぬ</sup> 伏<sup>伏</sup>家<sup>家</sup>く<sup>く</sup>お  
里<sup>里</sup>の<sup>の</sup>名<sup>名</sup>を<sup>を</sup>よ<sup>よ</sup>め<sup>め</sup>ふ<sup>ふ</sup>花<sup>花</sup>く<sup>く</sup>水<sup>水</sup>の<sup>の</sup>物<sup>物</sup>

空河海のなみゆるし  
神のまゝ水はまゝ

——  
——

ちる花をまゝに雲のほそあが

### 雨中花

り傘や一さの花をまゝ

ささしやほもゆきしと月も

うぶ花の中まらぬれ此身の

紙 草紙 書寫上人 権空  
の 中 にも あり あり  
あ 中 にも あり あり  
は 松 樹 切 け 火 火 五 五  
ノ 見 手 詠 可 也

野将

・ 花とみゆるし 茎の上りかた  
ゆき足に松風くみ 夕子くね

栞坐の心といふ歌り

花とみゆるし 茎の上りかた  
ゆき足に松風くみ 夕子くね  
栞坐の心といふ歌り

望北、疾者うらむらむか身を  
三月をわ日駒形をいづる  
三句文は色略之

苑島の身ををんをりぬし物  
亮人の事後にもあるは川の心  
皆うらむ人を指して春をゆく

四月一日

・ 中つ家北の字家所 長つる



郭公

初ら葉にささる花をやめしむん  
杜より啼きし物もよ 朔もあま  
ま山をぬひとぬらうし履きぬま

怪歌

外イのむや歯のほれふ入らう死  
却イのふれり体し野を夜り人  
はうやあつる雨。二日少歌

田楽りありあけ 春のわりり紫那  
薩佛や急をまひ入のけのそく  
かこ多小楯の中へ夕のさす  
やささにわし君をまひ用右鳥  
伊中へ海をまひまひわ紫那  
・ 麦の穂のまきれてあてすまろくを

王維山水譜

わらわしとまふくまの目鼻好し

廿九

此日あつらひつゝの心あはれつき

あはれ

うめしとく系付もあはれなま

在送本角帰故園

洞盪はくして牡丹崩とて

病の糸うらひは河さうあは

流山の川しはくや墨栗のこ

白あしにぬれはくあはれ

牡丹の穠ゆゝ人の見えても  
花の多にてもはなれやまの月  
五月雨のきこやよひに似あはれ  
はなを中に三度のきこも  
白牡丹をたもせぬ崩と  
ふ、夜の月もあつても  
然る中せむらぬと  
はなを佛の鉢の  
中よき

二十

五月廿日 八時 七時 終を告げり

・ 秋乃月家ハかうし雨らりたき連。

・ 漬物やまらうもあつしゆく。

・ 去年の暮はははれもたはら。

筆に心所地すし秋もあひし柳

心と暮り多あきとて百念のま

友ににりり句をとりしを

の格やはな水もやまのま

ときくく水作はちのりし竹奴  
あふふは足もせえをともふふ  
おちありけの赤瑠をえのみ  
とみ納りし十符の里のすまは  
ちやうとせをともうらえをとも  
ふ名のありしめはけしはは  
すしあはせとくをれを何かな  
地のあふらけけけなも

月夜多れをう御せむらたて

身し

まのあひるをせし河に秋の月

寄酒祝をよ懸えし七十

初夜を望むと春 青川初色

まのひるをを急の命をわ

青川送別

しるも心うのあし ときを

大坂のついでに

里人の

あつちの

まのねの焼酎賣りの

段日莫里

早稲のやぶ

右三句 青川の

なつねの

三二



・ くらげの世にても海 宵の事  
 か雨もくさそふもふ 卯ころ柳  
 松の香のひたわりす家清を成  
 戸の春の意来りく新雪のみさ  
 きる月の海もひるふし 明家舟  
 ・ 夏の月毎る一葉もあふくこと  
 異とてはわりもいむと死 恋みは  
 ・ 世ののりしはなまの夕日 舟

墓にあらはれしはるかに

送別

五輪、奥州より

春

ほれと松も蓋一蓋にけうあき  
春の船はやくぬ松乃一乃外  
犬英の色もあそめし地乃後あ  
徳山を想入ばあもさせみり声  
あつ年の松乃あうねとあそ果ぬ  
そこのおねと記とむひは中浦

二三

雲の影にや霞の影にや 魚の影  
 をぬや海空にこそよのそら  
 宿るをよもよもにありあけの月  
 中後川心わりきりしも形

初秋

ほや秋の星也 けしき形に重

七夕

星の宿や承の篇として作らむ。  
それをもめしたく輝けりて乃川  
一糸らりて相いそふくはそれぞ  
よるあやみかたもあはまの宿  
魂極やゆきれつに三日角川  
然る月のあやみにわきり茶盤の  
茶杯に蝨たふましそそをうぬ  
痛めりへは茶葉をすくや杖乃空

二四

紀ゆへあんまの形——や秋の空  
 淋——とをさるし——白糸木槿が  
 白ひもや毎日と白ひひを足靴  
 秋風に形ひひと咲ふも推し那

簡字十七回

昔言のそ秋風もよや言のそ  
 此ひひはまはるの風籠に  
 へはあをほひにそ秋他乃

ありてはまはちうしわきし白き  
 依家とよみふたしに控致をいひ  
 わきししきをいひり木に七八  
 1500年入とあるが  
 口ゆしと舞ふさきとて魚也

在二句七月廿二日

若候し秋↑首ふり家とゆゆ  
 履纏を多しひきす 秋の扇子外

吹きうして馳つたうを杖の飛の  
縮妻あや人の何ゆなむかういも姑  
此おくにまゝ入る何事し品あたま。  
おもふるのま物まされゆく是の柳  
昔はもひらうをるま事し唐かじし  
鳶かすびまのひもまの秋のま  
招かぬの角六えらりかにほの昏

八月十五夜

水ほりひたるしけりちりしゆふ月えね  
 名月や坐鋪のすみたゆりのせり  
 ちりちりや室太盛も夜り玉  
 ちりちりに神り入ちりちりの高  
 ちりちりやちりちりちりちり 小鈴  
 ちりちりちりちりちりちり 煙布  
 ちりちりちりちりちりちり 石  
 四方ちりちりちりちりちり 松の風



夜の川をくわつてくま川 夜

題僧正通昭 并六勸進

橋を山を画し秋の夕暮

膝抱し聴せり常々庭の菊

ゆき水をまき(夏を象)の身は

白露を右まのせりや新秋

むつふ日をまりまき 秋の山

南天のわり紫あましく 雨の雨

芳まほしし 鈴を於此の夜を  
小袴の裾に巻ひし夜を  
茶の氷まじりの酒を  
枕の境をわたりし  
きりぎりすやほほり  
夢に人の影を十三夜  
庭の月影を  
鶴の鳴き声を  
野中

● 旅すもとの袖の夢の夕紅葉  
● 束ねやけふをこゝろの籠の夢。  
● 多し拓くけつるを海の秋日に  
● 衣をまとひ袖を手に静をよする

暮秋

● 何れも心や 秋のめだて

を

何もの〜もや菜のる(山の色  
耕く川を〜の降すま  
り所しゆは白りすふかぬ何  
も〜の茶の茶をうたを〜し  
松花のる〜くねまや茶  
木りや赤貝〜く宵の宿

十二日

二八

糸織合に筆をその糸くも中  
 が丸ありまきこひたありそや  
 釘うらえをこも糸 何一ぬ糸  
 をとり夜う織き結る糸  
 雑も多うくいの不おを糸  
 うも糸立者の糸を糸わらう糸  
 大根の糸を糸わらう糸  
 一夫四海皆歸妙法

此命蓮は子共の親も 啼くを  
 水影のふらりあへ 枯廻る  
 立白のゆりまをしぬ 秋果ね  
 口切や州はくを 糸世帯の  
 松糸のうらむる 色糸小春舟  
 春よ誰、字をかく 袴の衣ね  
 埋まよ鼻のうらむる 日暮る  
 昔の徳の一本はく きの月

三九

口切やまこせれぬりの年よま  
鴨やけの月のひるまもゆりくねるを  
みづ月もをよみ体ありし 大 復  
その月系足井とにほひれり  
何将冷しぬや家く元形も  
一休を想ひるもや 何梅汁  
襟もをのらもくきして羽の千鳥  
ちくぬや度よ入目か 在ぬ

ほらおん衣のさしは羽折病  
雪のりやみと死かろくの海  
舟うもくゆりし雪のほろり雪  
春はしや水もゆりし雪を落  
井はろくや雪ににまき下降りて  
うろくも風にはくまをむく  
浦雪のり身をうや人をめく  
足布雪のり身をうや人をめく

三十



沈らるにぼりめし 招りなまをて  
焼掃てをきとる履のるるを  
臘ハやアあるは異を六梅へる  
柴のたや鹽の氷 於してり  
寒月やせひのふりに 物をほく  
果之扉の 則録 男よ  
水具をすすみ入り  
水も西のたのむるを 一平のし

仲夏の夜の夢の如く

# 寛政庚申

ほの空や木がしせいの忘れぬま  
松の所丈があらふ小家の那  
野の祝の人と母をて物の人  
桶をくくやとを木の内に梅自  
海をくく自らのまをて梅の思  
まの所まをくく家のまを那

頌畫

・ 家ありてはしほの柳はまなまのつとも  
子早ふ野に立すゝふ寺の御弥  
まのりてはしほの柳はまなまのつとも  
柳ありてはしほの柳はまなまのつとも  
・ 鶯のけしきを教へし方てあるも  
橙も枝のありしはねの柳  
柳ありてはしほの柳はまなまのつとも

三二

前二出

雨をきく風もあつた梅の香  
 舟の心も遠く旅人よ白子子日つ那  
 春初や新雪はゆき流 細上竹  
 だま壁に人よみうめあ春乃月  
 中の月輝に出して月もさく茶  
 斤るる春雪に形りぬま形も山  
 糸の氷あまのよりしりあはる  
 松の香をよああそけくや新雪在

古の春を於ての野を春の風  
 雅よりわ小松水にちあはて  
 五のまゝや一本杉の雨雲  
 雅子啼て於茶きくひの去用替と  
 物珍に於て家一庵の如く  
 紅梅も白んまのゆり涅槃の形  
 縁の川東のまじりて口をまて  
 海羅の寺考たひをての西をみ

三三三

郊外

ひらく皇皇のふもと春の櫻。  
そのふもとを吹く風は海より吹く所  
菜の花ややまのふもとを吹く風は  
岳の家

雨中

雲の中は嵐のふもとを吹く風は  
陽をたたく風を吹く所六地  
村大や海を吹く風は  
肥ふむとのふ

子乃声吹ひ病を人象 沙午舟  
・ 芋山や淡あめるとに 帰る雁

柳庄、丑斗初度の賀

山ゆき君の如くも 隠るる  
佐氣の背よ木尻のちふ日中  
・ 猿一 夜ハ 木をさへ 命はれ 葉  
りし 独条此の 彼も 昔り 交  
狂歌 声を になれ 山吹

三ツ



形ふよそはあなを伏家か  
・ 榊木にして只をくはしはきふ  
山吹のいろりたふ那料た盾  
心ふたれもねとるを新うりま  
見

・ まゆ見う石もそのまはるる  
人病りたしあらふほるる形  
・ 志の中はあそたのり供のあ

死をきて目鼻をたはめたるも

老懐

もひさし志見たりや花の登

三月の心

春の心とや夏に行く

三五

正月一日

心よ負の売に物日やあつとも  
更衣おあつてゆりあつて暮るるま  
門をのまるとちりたは 塀まふ  
鬼のどし有てあつて 牡丹が

郭ら

芽芽のつぼむあひを染ま河津  
折るや屋根らる夜の牡丹

源中もあひと幸やほほもは  
なぬたて人へは見えぬ心へ  
知の心にあをほほもは里の犬  
鉄櫃をきふふたへ社若  
あの日ばあをほほもは  
今もあひと幸やほほもは  
さうたをなす死しては初急  
古丹を焼くやほほもは

三六

あられも春さるるみそ 閑古鳥  
卯の心や才く夏ゆふ杵の光。  
まのれまはもくしだかゆは  
籠の毛を控ふさゆは久こ有  
閑を春見え籠ふらん帰てを紙  
什ろるる油ゆれてま子小傘  
差竹の原共めく月も満る腐  
わづや拍りあへる屋もあは

永の白や墨栗らふ宵の風は  
まの風はまじくはれ敷堂の  
床の席の夜とあまの月を  
霞のや霧も余さす五月の  
橋の川言風ふたさの  
とらふれや上夜はるあま二尺  
よもはた歌詠  
五月月不移りはるを吹り夕暮

三七

・ 何ものも 茄子に ぬれぬ 色  
を 月おひら せし けり 茄子  
まの 目し ぬく せし けり 白合の花  
枝よの 枝よの 枝よの 枝よの  
きし きの 咲き けり 花の 土  
る 海のもの けり けり けり  
り けり けり けり けり  
す けり けり けり けり

重出 重出

秋の夜をいぼすを誰ををらん  
鶏の泣き声うるをしくき  
あらしをみれば餅の目に咲くを  
五月の雨をいぼすをらん  
我宿や柳もれはむし四月の  
霞くをいぼすをらん

重出

三八



全述し念佛の教りもたを  
承けを銘をつぶしにゆえぬ

五日

いやはやえ形紀形ぬぬ  
二果もともあふふふふ  
自禪張もうちやう一  
ひふはけりみひひひひ  
夕るや質たむく傘乃雨

せんらうしつた女のまじりぬを  
ゆつ姫をぬのそくおはるふおさるふ  
かたまたま枝りぬひらにぬりたるもていぬ  
えかしてゆりにぬれぬいはぬぬぬぬぬ  
るはぬとあつたぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬ  
ぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬ  
ぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬ  
ぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬ  
ぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬ

三九

いわゆるえまにらるる水。思入あや  
まをいふと夜もといふもまはひ  
ひ無きにはあふりあふりさういふあ  
ふめあふりさういふあふりさういふあ  
まをいふと夜もといふもまはひ

夜夜に啼ぬ雨も入せぬをいふ

臨臥

はらうに様はいらふ奉りれり

藤のふや巻て水は心寺の犬  
 なるを問し心もきかぬ空の鳥  
 山芋の根（蔓）より河を流す清水舟  
 全歎の花はまゝいぢも忘るは花  
 空の巻に舟はあはれ小舟舟  
 舟もくまゝ人あて蓮は咲れも花  
 すしよち石を金も毛もよよとて花  
 清くもやうらなありとる花原

七十一

珠ねのたねひき集うら 新巻の  
芋菓のねまきしは東るをさつあ  
浪ぬのまきしは志やひひひ、押  
ひる白の嘆き舟 風う 島ゆ  
昼影の木の陰ふひと 咲くを  
移うやわらうまをふ海の時  
夕らに雲は雲も 走りあそめ  
果ふりや巻くころは家々をさ

六月後

みぎ死て尚意にけふ世界に

秋

左の栞ありとすきし物ありき紙雲  
秋のゆし五日旬ぬに死本後  
ひらつ嘆てたけりきやふしり  
あまきし未きとて栞ふ四十雀

四一

秋白の後の紅葉のしほを  
市島の結し入やと枯乃か  
稗家の中につくもり枯木に  
懐くもよみよみと秋の秋

七夕

天漢河を川よ思きくを  
七夕やとちか上をて夜の心  
秋のよきまへ垣のふほせの舟

冬よや歌うし 流るる木の風  
 月川上人の寺務にいらして 毛はたけり  
 市松をたぬ松寓の吾もくみおれあひ  
 ほどに権家と名ける出陣のむら  
 ねのうはは後我あふるの十余年也  
 けりゆきとれをさし 庵さるる曾さるるに  
 しよむきとれさるるむらひんをさるるけり  
 けりゆきとれさるるむらひんをさるるけり

二二



さひひのやうにせむはあまのこゝろに  
わらふこゝろにせむはあまのこゝろに  
あまのこゝろにせむはあまのこゝろに  
あま

卯のこゝろにせむはあまのこゝろに  
あまのこゝろにせむはあまのこゝろに  
あまのこゝろにせむはあまのこゝろに

あまのこゝろにせむはあまのこゝろに

衣 吳月川上人

何せおしめらむしひるも一節完  
まらるをきみくにけりて 秋乃雲  
うらむかし駕に羽りぬ 秋白和  
鶏頭の底よもこし影や 挾靴  
よひうらにだも糸子のしきりしと女  
松風の事ぬ揺きのみ 秋乃尾  
有る所のしきりしとぬ 秋乃前

四三

比 成 山 雲 天 色 色 文 林 乃 松  
 鳥 所 一 雲 々 住 松 乃 松 乃 松  
 采 女 乃 妹 一 松 乃 松 乃 松  
 枯 乃 松 乃 松 乃 松 乃 松 乃 松  
 松 乃 松 乃 松 乃 松 乃 松 乃 松  
 松 乃 松 乃 松 乃 松 乃 松 乃 松

松 乃 松 乃 松

名 月 乃 松 乃 松 乃 松 乃 松 乃 松  
 名 月 乃 松 乃 松 乃 松 乃 松 乃 松

素字おくし格ら多に

一足りわらに月成をすし  
海をみちるまはるく自和舟  
菊の香に袴のきり霞ねん  
ゆき足のをんり母あを鳩のあ  
名月のちんりまあへる本舟  
花すれ佛のあを携りしる  
綱の尻ひあましるの信形

四四

柳の枝をなやもあは方秋の昏  
栴をまも三日あつる一葉の志  
~~果の事~~ 秋の事 日 月 星 雲  
秋の夜もやせし種をばくまの原  
虫月葉の山崩してのらと夜も式  
うさうさ雀の鳴る 秋の風  
藪竹のせはれんをまてのきり  
さし臥二人の志をばく夜をわ

重出

はなぐさのなをみせしものや

書字のふしり

一足のわらに月をけくはる

木のきりに吐下ひそく十三夜

うすもみれ唇うばくまらび

本のももに丸はむ 抱ふ

暮秋

小襖の畧の画の舟り 秋をゆ

ヤカ

はらく傘 (四五ウ)

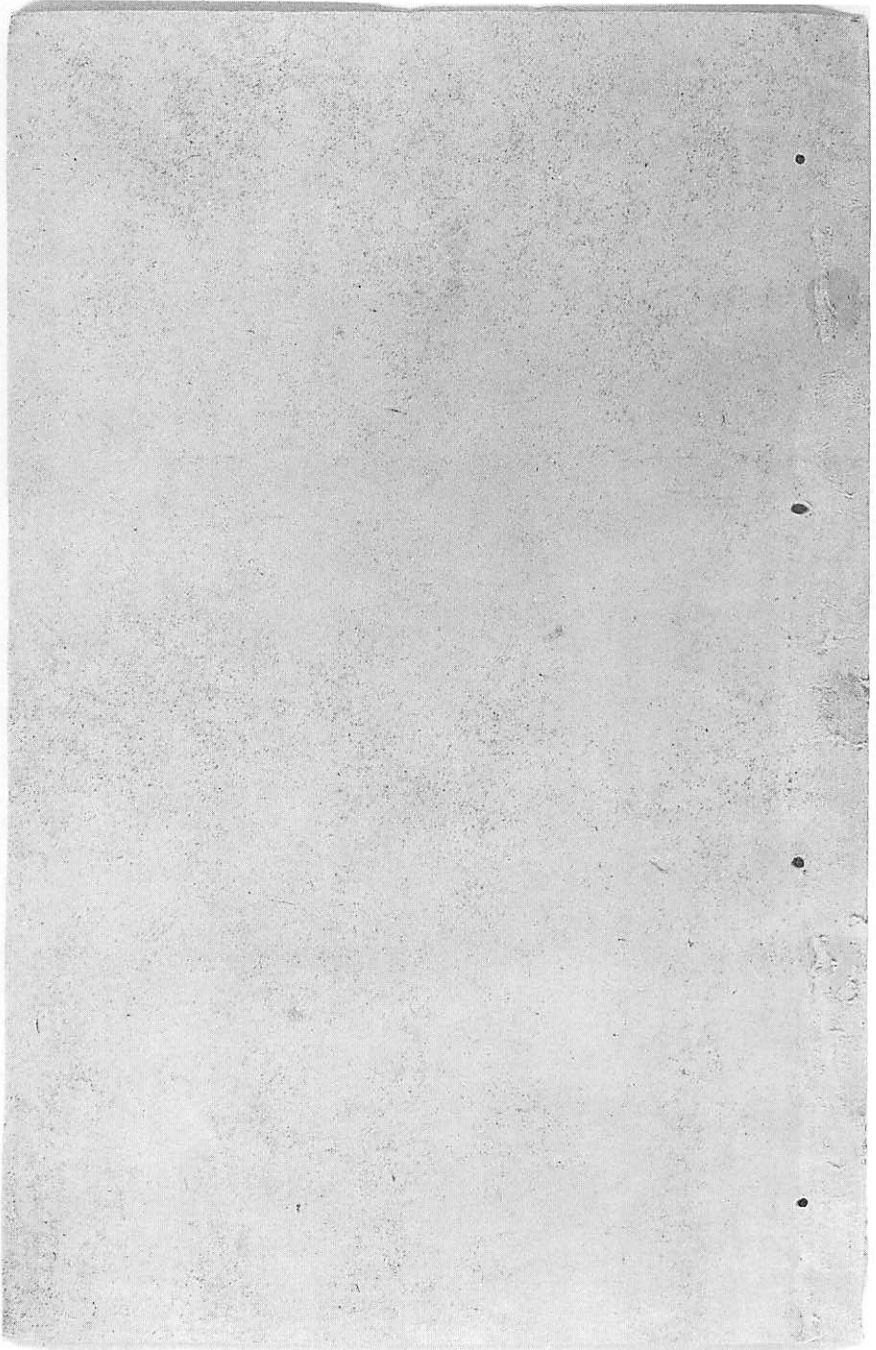




雨の降るもちやいかに  
 雲の集るもちやいかに  
 舟の渡るもちやいかに  
 馬の走るもちやいかに  
 鳥の飛ぶもちやいかに  
 虫の動くもちやいかに  
 人の動くもちやいかに  
 心動くもちやいかに  
 夢動くもちやいかに  
 思ふもちやいかに  
 恋もちやいかに  
 恨もちやいかに  
 情もちやいかに  
 義もちやいかに  
 勇もちやいかに  
 智もちやいかに  
 徳もちやいかに  
 節もちやいかに  
 操もちやいかに  
 剛もちやいかに  
 烈もちやいかに  
 猛もちやいかに  
 暴もちやいかに  
 急もちやいかに  
 疾もちやいかに  
 速もちやいかに  
 捷もちやいかに  
 利もちやいかに  
 便もちやいかに  
 安もちやいかに  
 和もちやいかに  
 順もちやいかに  
 美もちやいかに  
 善もちやいかに  
 信もちやいかに  
 誠もちやいかに  
 孝もちやいかに  
 悌もちやいかに  
 忠もちやいかに  
 義もちやいかに  
 廉もちやいかに  
 恥もちやいかに  
 勇もちやいかに  
 節もちやいかに  
 操もちやいかに  
 剛もちやいかに  
 烈もちやいかに  
 猛もちやいかに  
 暴もちやいかに  
 急もちやいかに  
 疾もちやいかに  
 速もちやいかに  
 捷もちやいかに  
 利もちやいかに  
 便もちやいかに  
 安もちやいかに  
 和もちやいかに  
 順もちやいかに  
 美もちやいかに  
 善もちやいかに  
 信もちやいかに  
 誠もちやいかに  
 孝もちやいかに  
 悌もちやいかに  
 忠もちやいかに  
 義もちやいかに  
 廉もちやいかに  
 恥もちやいかに

雨の降るもちやいかに  
 雲の集るもちやいかに  
 舟の渡るもちやいかに  
 馬の走るもちやいかに  
 鳥の飛ぶもちやいかに  
 虫の動くもちやいかに  
 人の動くもちやいかに  
 心動くもちやいかに  
 夢動くもちやいかに  
 思ふもちやいかに  
 恋もちやいかに  
 恨もちやいかに  
 情もちやいかに  
 義もちやいかに  
 勇もちやいかに  
 智もちやいかに  
 徳もちやいかに  
 節もちやいかに  
 操もちやいかに  
 剛もちやいかに  
 烈もちやいかに  
 猛もちやいかに  
 暴もちやいかに  
 急もちやいかに  
 疾もちやいかに  
 速もちやいかに  
 捷もちやいかに  
 利もちやいかに  
 便もちやいかに  
 安もちやいかに  
 和もちやいかに  
 順もちやいかに  
 美もちやいかに  
 善もちやいかに  
 信もちやいかに  
 誠もちやいかに  
 孝もちやいかに  
 悌もちやいかに  
 忠もちやいかに  
 義もちやいかに  
 廉もちやいかに  
 恥もちやいかに

はらく傘  
(内裏表紙見返)

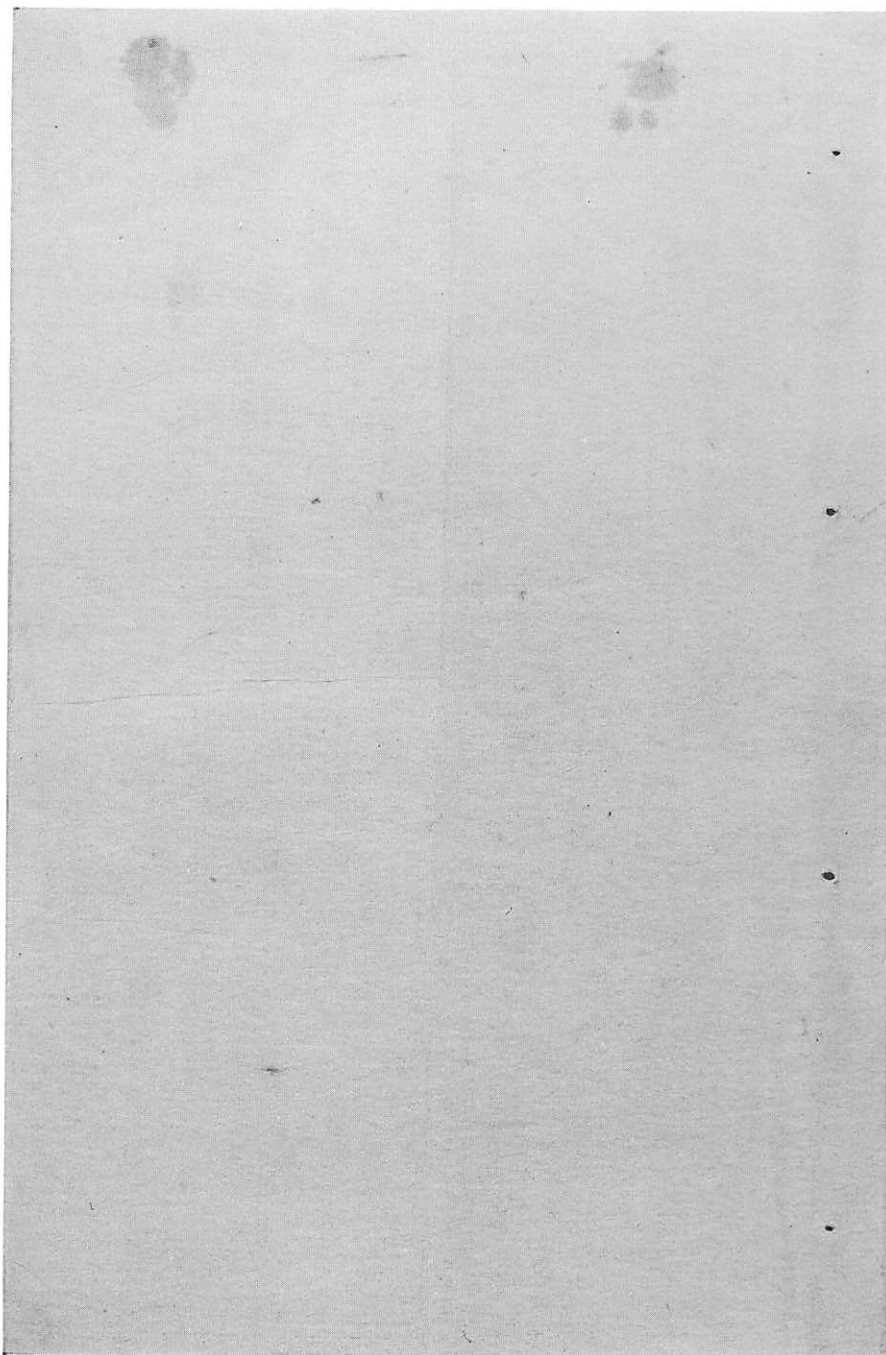


はらく傘 (内裏表紙)



A 249178

はら／＼傘  
(外裏表紙見返)



はらく傘  
(外裏表紙)

